

震災メモリアル市民公開講演会

県の津波被害想定の問題点を指摘

田結庄良昭神戸大学名誉教授が講演



県の津波被害想定の問題点を指摘する田結庄教授(右)の講演に市民ら51人が参加した(左)

協会神戸支部は昨年12月13日、協会会議室で震災20年メモリアルのプレ企画として、田結庄良昭神戸大学名誉教授を招いて市民公開講演会「南海トラフ地震で何が起きるのか—地震・津波のメカニズムから防災を考える—」を開催した。会員や市民51人が参加した。

講演会の最初に田結庄氏は、東日本大震災を受けて南海トラフ地震の想定震源域が従来よりも広げられ、予想される地震の規模もM9.1と以前より大きくなったことを紹介した。そして県が作成した、津波による被害想定を解説し、この想定には、地震の揺れによる液状化により防潮堤や水門が壊れ、被害が拡大するという阪神大震災での教訓が活かされていないという問題を指摘した。また、阪神淡路大震災で、液状化しにくいと言われていた六甲山の山土で造成されたポート

アイランドでも液状化が起こったことを紹介し、予想される南海トラフ地震では揺れの時間が長くなるために、液状化が起こる危険性はさらに増すと警鐘を鳴らした。

参加者からも自身が居住する地盤の特徴など多数の質問が出された。また、田結庄氏は質疑への応答の中で、昨年が起こった広島土砂災害にも触れ、地域によっては豪雨により広島以上の被害が危惧されることなども指摘した。

兵庫県保険医協会

277号 2015年1月25日

神戸支部ニュース

発行 兵庫県保険医協会神戸支部

連絡先 〒650-0024 神戸市中央区海岸通1-2-31 神戸フコク生命海岸通ビル5F

兵庫県保険医協会 TEL/078-393-1801 FAX/078-393-1802

2015年新年のご挨拶

神戸支部長・田中 孝明



神戸支部の皆様、新年明けましておめでとうございます。旧年中は神戸支部活動にご協力いただき、誠にありがとうございました。

さて昨年末に、衆議院総選挙が行われ、アベノミクスの評価の陰に集団的自衛権や秘密保護法、原発問題等、今後の日本の方向性を左右する重大な問題があるということは、あまり議論のないまま選挙戦が終了し、結果、自民党と公明党の与党が圧勝するという結果に終わりました。

本当にこれでいいのでしょうか？

社会保障の分野においては、年金問題と同様に、日本がTPP参入することにより、混合診療解禁、薬価の見直し、アメリカの民間保険会社の参入等、まだまだ国民に対して説明責任を果たしておりません。

また、今後は増税はもちろんです、相変わらずの医療費抑制政策も推し進められそうです。協会も皆さまと注意深く見守っていきたく思います。

未年の今年、先行き不透明な情勢ではありますが、保険医協会は、草原にたたく羊のように優しく、羊毛のような温かさで各種活動を行って、皆様の生活の癒しとなるように日々精進致す所存でございます。

本年も保険医協会神戸支部をよろしくお願ひ致します。



阪神・淡路大震災から20年

『長田からの手記』

協会神戸支部は震災復興長田の会への参加を中心に、現在まで復興の課題に取り組んできた。震災20年にあたり、長田区で開業している会員から寄せられた手記を紹介する。



右写真：住民の運動により市内各地で多くの仮設住宅が建てられた

阪神淡路大震災20周年『長田からの手記』によせて

神戸朝日病院 金 守良

十年一昔という言葉がある。あの阪神淡路大震災から二十年が過ぎた。二昔が過ぎたわけである。月並みであるが、感慨無量である。ただ、懐古趣味だけでこの20年間を振り返るのではなく、一市民として、一医療人として震災復興過程の検証をすることが重要と考える。たとえば、この20年間、震災直後から市政が進めてきた神戸空港の現状はどうかをみると、赤字体質からの脱却は容易ではないように見える。又、2万人を超える雇用の捻出を展望し、基幹産業として位置付けられた医療産業都市(構想)の現状をみると、当初の目標とは程遠い。阪神淡路大震災後、日本では、新潟県中越地震、東日本大震災などの大地震が相次ぎ、その地域の復興は道半ばである。

そうした中で、震災復興モデル都市神戸ということばが聞かれる。三宮付近やハーバーランドのきらびやかな景観をみると、その言葉は現実味がありそうに思えるが、そのことばは長田区に存在する医療機関の長としての私の立場からは少し違和感のあるのも事実である。

まず、第1に人口の推移である。震災前13万5千人あった人口は、その後、減少したまま前値には戻らない。2014年10月1日現在9万8391人と10万人を切っており、その回復はすすんでいない。

第2に産業の復興の現状である。例えば、地場産業であった、在日コリアンもその生産の一角を担っていたケミカ----- (3面に続く)

(2面から続く)-----
ルシューズ産業の衰退は著しい。

又、商業の面でも低迷が続き、行政主導で行なわれた大正筋商店街の再開発ビルの現状(林立する高層ビルとはうらはらのまばらなシャッター通りの様相)はその象徴である。

第3に医療機関の現状をみると、医

師会員数からみると、震災当時A会員は152名であったが、現在、111名(2014年10月現在)であり、その数の回復の見通しはない。

長田区の完全復興ののちにこそ、震災復興モデル都市として、神戸が全国を勇気づけることができると考える。

震災の経験を社会の礎に

江原内科クリニック 江原重幸

震災から早いもので、来年で20年となるそうです。当時の自分は研修医1年目の終わりで、震災を西脇の地で経験しました。家族は被災し連絡が取れず、日々の仕事に従事していたその日の午後、実家を含む周囲の数戸が倒壊している様子を空撮映像でテレビから目の当たりにし、被災地に向かいました。上司に相談してから向かったのですが、後から上司より「患者様を他人に預けて行くとは何事か」とこっぴどくしかられた事を思い出します。

震災後も様々な問題が起こり、大きな社会問題となりました。それらの顛末は皆さんご存知の如くです。単に先送りされただけのものや、首をかしげる物もありましたが、私たちはそれらの問題を乗り越えてきました。

震災から立ち直り日々の生活を始める人、震災に取り残され日々を踏み出せない人、立場も余力も異なる多くの人たちの間で様々な軋轢を生じました。援助の手をさしのばす方、それを受ける人々、公的であれ私的であれ、それぞれに思い

があり、言い分がありました。色々な話に一喜一憂し、自分なりの思いで物事を見ていたつもりです。当初は助け合いの精神の元、様々な人のためにいろんな事をしました。しかし今思うとやはり厳しい見方に幾分偏っていた時もあったと思います。身を削って努力していれば、周囲も努力するのを当然と思い、ついつい人に厳しくなる。「智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」と夏目漱石の一説が思い出されます。「余裕が出来て初めて人に優しく思える」というのは本当に自分が凡人であるのだなと感じます。

震災の年に生まれた人は来年成人します。ボランティアに来た人にもその後の20年があったと思います。あつという間でしたが「あの時の思い」は必ず後の、そして今の人々の心の中に息づいていると思います。あれだけのことが有り現場で必死に情熱を燃やし乗り越えたのですから、その経験は社会の礎になるものと思います。

20年目の新長田

神戸協同病院 上田耕蔵

「長田区は震災前と比べどう変わったか？」これへの回答は住民に聞いた方が早い。患者さんに聞いた「震災前と今はどう違う？」。

「あかな(再開発の)地下がガラガラや、店がない。それから人が減った。」新長田の変化はこの2点で表現できるようだ。

新長田駅南側には再開発ビルが林立している。みかけ上は未来都市の片鱗？を感じ

させると、再開発ビルは大きく作り過ぎた。店舗は一部に地下と2階があったとしても大半は1階だけで十分だ。2階部分の通路や道路をこえた橋などは不要であった。実態、賃料を著しく安く設定して業者を誘導しているが、テナントの半分以上は空いたままである。商売が成り立たず自分の店舗を売ろうとしても賃貸料が安いので買う人はおらず、売れない。また再開発ビルの住居は管理料(共益費)を安くして販売している。元の住民・店舗の管理料は高いまま(9倍)で、負担をかぶったままである。(裁判が起きている。)

確かに再開発ビルは長田区の人口減を最小限に食い止めている効果はあるようだ。今でも駅南側にマンションが建設されると、安いのと便利なせいかすぐ売れるようだ。入居者は地元の人より外から



震災当時の様子 地震により住宅は倒壊

来ているようだ。あるいは中年に長田から西神に移ったが、高齢になって戻ってきている人もいと聞く。飲み屋も駅周辺に集中するようになったようだ。しかししょっちゅう店に入れ替わっている。消費する人口が減って苦戦しているのだろう。

比較的最近のショックな出来事は大丸の撤退であった。新長田の隠れた自慢であった大丸も13年1月に撤退してしまった。患者さんは嘆いていた。「あとは若者向けの店に替わったが、それまでの有名店はなくなった。地下にいけば、美味しい店がならんでいた。それが東急になり、なくなってしまった。」東急の店舗は圧倒的に安普請である。普通のスーパーより背の高い灰色の陳列棚が林立している。機能一色で作られている。----- (5面に続く)

(4面から続く)-----
一般スーパーの風情も感じられない。先ほどの患者さんは「まるで監獄みたいや」と言っていた。しかし不思議な物で1年2年と経つうちに眼が(脳が)慣れてきた。監獄には見えなくなった。慣らされてしまった。

震災後、再開発地区周辺ではしばらくは自宅の再建は続いたが、やはり空き地がそこに残ってしまった。その駐車場がどうしたことか最近急にtimesに変わっていている。しかしまちづくりは続いている。真陽地区では防災福祉コミュニティが熱心に活動している。津波発生時の避難行動の徹底(津波に伴う

火災がつきもののため、高いビル避難ではなくJR線路より北側への避難が呼びかけられている)や幼稚園児の避難訓練などが行われている。

地蔵盆も盛んである。これほど子供がいたのかとも思える程の多数の子供達が地蔵さんを練り歩いてお菓子をもらっていく。地蔵盆の準備と当日お菓子を配るのは各地区の高齢者である。患者さんに「子供がすごく多いね」と聞くと「他の地域へ引っ越した家族の子供たちも集まってくるからね。でもちっちゃい子供らにお菓子を配るのは面白いわ。」と答えてくれた。(この患者さんは疲労のため持病の心不全が悪化し入院となった。)

阪神大震災を振り返って

松田眼科医院 松田弘子

あの大きな震災を経験し、もうこんなことはないだろうと思って20年。毎年、毎月、色々な事件や時事が起こっています。天災も多く、今年も大きな台風がきましたし、雨も200~300ミリ/時の豪雨もきます。雨も以前の梅雨時期のようにシトシトとは降らなく、バーッと一時期に降り、その時は何センチ~何十センチの水の流れになります。家屋に浸水やガケ崩れが起こります。長田の町も殆ど建て返りました。私の医院も全壊し、平成9年に建て替えました。今はしっかりした建物で、少々雨にも台風にも抵抗しています。

しかしそうになると、私自身の気力の低下・体力の低下・老化が気になり、息子

が他の場所で開院しているのをみると、ここへは戻らないのだろうと思い、医院を閉める日を考えています。気力・判断力が衰えたらいけないと思い、毎月積極的に生きています。セミナー・学会・医師会の行事は出席し、医師としての色々な知識を取得し、活発に動いております。眼科専門医の単位も5年で取得すべきを3年で取得し、色々な会合にも出席しています。

しかし、長田区の人口は激減し、今後は7万5千人も切る状態です。開業(医師の)する人も殆どいなくなりますが、既存の開業医は必死になって生き残りをがんばっています。

長田の町の小さな映画館

神戸協同病院 石川靖二

震災後の慌ただしい日常の診療、一日一日が過ぎていきましたが、被災地のど真ん中にいる自分たちに“いったい何ができるんだろう？”と、考えるようになりました。

以前から、高齢の患者さんにチャンバラ映画を見てもらって、その喜ぶ姿を見たいと思っていました。そんな思いつきから、映画

サークルの活動はスタートしました。震災の年の病棟の七夕会で、嵐寛寿郎・美空ひばりの「鞍馬天狗角兵衛獅子」が1本目。

その後、病院内の例会として映画会は継続、ポスターを張り出したり、会報を配ったり、または口コミで映画好きの患者さんが、参加するようになりました。仮設住宅での一人暮らしのため淋しいとか、映画を見に長田に来る事が嬉しいとか、映画自体を楽しむ以上に人と人との交流の場として、このサークルを大切に考えてくれる人が多いようでした。スクリーンの前では、医師・職員と患者という区別なく、まったく対等な立場であることが、我々にとっては嬉しいことでした。

サークル発足時から、「映画の出前がしたい」という気持ちが有り、訪問看護科の協力で、1995年12月より仮設住



再開発で新たなマンションが建つ中、住宅再建できずに残る更地

宅での「ふれあい映画会」が始まりました。

みんな画面に食いるように見入っています。頼りなさそうに見える高齢の方ばかりですが、その集中力、インテリジェンスの高さには敬服してしまいました。震災後5年ほどで仮設住宅が閉鎖され、その後は復興住宅に活動の場を移して、映画会を継続しました。地域での映画会は20カ所ほどで数十回行われました。

少しブランクはありましたが、最近まで月例会は続けられ、出張映画会を含めると、300回近く上映したことになります。毎月、気心の知れた仲間と映画を見て世間話をして、私にとっても癒しの時間となっていました。しかし参加者のほとんどが高齢となり、夜道を杖をつきながら帰る姿を想像すると、そろそろ潮時かと考え、私の還暦を区切りに昨年末、----- (7面に続く)

(6面から続く) ----- 「チャップリンの独裁者」をもってサークルの解散となりました。

「病院は地域の砦」という震災時に痛感したことはかなり、希薄になりました

が、患者さんと一緒にスクリーンに向っている時、病院は地域に根ざしていることを体感できました。長田の町で、震災後続いた“小さな映画館”での交流は、宝物でした。

震災から20年 政府の福祉政策の充実を

大畑歯科 大畑登代

平成17年1月17日 AM 5:45、限りなく長く感じた19秒間の揺れ。

あれから20年も経ったのですね。“なんとかこの地で再建を”と願った強い気持ち。診療所が再建出来た時の“さあやるぞ”といった当時の前向きな気持ちをなくしている自分に啞然としてしまいました。

震災時は、“これぞ人生最大の危機”と思っておりましたが、今現在の方が診療所の経営は難しくなっております。当時もバブルが弾けたばかりで経済は下向きでしたが、世の中はもう少し明るかったように思います。

開業以来30年間、診療所を支えてくれた妹(H26年2月2日、肝がんのため死去)をなくし、ちょっぴり弱気になっておりましたが、仕事は続けたい、こんな私でも頼りにしてくれる患者さんがいます。開業当時から通ってくれている患者さんは、ほとんどが年金生活者になっています。

現役のころは気にならなかった治療費が負担になっています。

入れ歯が割れた時、「このままくっつけてほしい」と希望する患者さんが増え



震災後に建てられた仮設住宅の様子

ています。新しくした方がいい場合でも、やむをえません。すぐに割れるのがわかっても修理せざるをえません。冠やブリッジが外れた時、絶対新しく作り直すべきケースでも「なんとかつけてほしい」と望まれる患者さんが多くなっています。これでは医療の後退です。

現在、政府が採っている福祉政策は、弱者を追いつめています。さらに医療者側も追いつめられています。

政府は消費税が10%になっても、医療機関を見捨てようとしています。私の診療所の継続の鍵は、政府の福祉政策です。公約どおり消費税を福祉に振り向けてください。このままでは診療を続けることができません。